



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第49回 日本語教育方法研究会

筑波大学（茨城県つくば市）

2017年9月16日（土）

9月16日に筑波大学で第49回研究会を開催いたします。次回研究会は節目の第50回ということで特別企画を開催する予定です。そのため、今回はプレイベントとしてJLEMの立ち上げから現在までJLEMのためにご尽力いただいている筑波大学の加納千恵子さんに御講演をいただきます。JLEMのこれまでについて振り返るとともに、これからについて考える機会としていただければと思います。また、今回も昼食交流会を開催します。一日を通して自由に楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第49回研究会開催について

日 時 :	2017年9月16日（土）
会 場 :	筑波大学
開催委員 :	松崎寛・加納千恵子（筑波大学） 小河原義朗（事務局：東北大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付（発表者・一般） ポスター貼付	1:40	講演 「JLEM25年の歩みを振り返って」 加納千恵子氏(筑波大学)
10:00	開会の挨拶	2:10	総会
10:05	会の進め方の説明	2:35	口頭発表開始
10:10	口頭発表開始	3:35	ポスターセッション開始
11:10	ポスターセッション開始	5:05	ポスターセッション終了
12:40	ポスターセッション終了 午後のポスター貼付	5:10	講評・JLEM賞発表 次回開催委員挨拶 閉会の挨拶 参加者全員で片付け
12:45	昼食交流会（～1:30）		

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入（p.15 参照）にご協力ください。

新規入会：3,000 円（年会費）

当日のみ参加：2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 台湾人初級日本語学習者による学習ストラテジーの使用実態－自由記述調査を通して－

郭毓芳（台湾逢甲大学）

本研究では、日本語初級学習者 64 名の学習ストラテジーの使用実態について自由記述を通して考察した。分析は期末テストの成績を基準に、学習者を上・中・下位群の 3 群に分け、K.J 法を使って分析した。その結果は、(1) 上・中位群は学習のプロセスを重視して理解を深めるために、学習ストラテジーを工夫している状況である。一方、下位群は学習結果を重視し、単調な学習ストラテジーを使っている。(2) 上・中位群は全体的な日本語学習を視野に入れ、計画するのに対して、下位群は目の前の課題に着目する傾向である。(3) メタ認知力の発揮は、上・中位群に比べて、下位群はこの 2 群ほど発揮していないが、ある程度メタ認知ストラテジーの使用が見られる。

2. MS エクセルの VLOOKUP 関数を利用した時間割作成補助ツールの作成

中川健司（横浜国立大学）

日本語教育において、教育場面、学習場面等「教室の中」で行われることについては関心が高く知見も積極的に共有されているが、学習環境を整備する「教室の外」の仕事については学会や研究会等の公の場で議論されることは少なく、知見の共有も進んでいない。時間割作成は「教室の外」の仕事の一つであるが、いつ(何時限目に)どこで(どの教室で)だれが(どの教員が)何を(どの授業を)という情報を整合性を保ちつつ管理する必要があり非常に煩雑な作業を要求されるため、効率化が図れば、教育業務の改善につながる。筆者は時間割作成作業の軽減を目的として、MS エクセルの VLOOKUP 関数を利用した時間割作成補助ツールを作成した。

3. 内容言語統合型学習による学習者の「内容面」と「言語面」の変化

村田裕美子（ミュンヘン大学）

本発表では、ドイツの大学で日本語上級学習者を対象に、「内容言語統合型学習(CLIL)」の教授法に基づき、「ナチス・戦争・平和」をテーマに実施した日本語授業が、「学習内容の理解」を深め、「言語能力」の向上に効果があったことを学習者 8 名の提出物をもとに検証する。具体的には、学期の初めと終わりに同じテーマ「ナチス・戦争・平和について思うこと」で書かせた作文を「内容面」と「言語面」の 2 側面から比較し、授業を通してどのような変化があったかを明らかにする。また、本調査結果を基に CLIL の有効性を示し、今後の日本語教育の発展に活かしたい。本発表では、調査の結果と結果の裏付けとなる授業で扱った議論についても紹介する。

4. 日本語授業におけるゲーミフィケーションを用いた学習意欲向上の試み

岩本穰志（立命館アジア太平洋大学）

2016 年の秋学期から「日本語番付」という相撲をテーマにしたゲーミフィケーションを授業に導入し、授業内外での学習にポイントを付与してポイントに応じて高い番付に昇進させることで、学習者の学習意欲の向上を図っている。学期末にアンケートとインタビューを行ったところ、学習意欲が向上した、日本文化への関心が高まったといった意見もあったが、ゲームへの取り組み方には大きな個人差が見られ、授業外での自主学習に対する得点配分が少なすぎるという声も多かった。2017 年の春学期は授業外での自主学習により多くのポイントを付与し、Facebook ページで学習者の番付昇進を表彰する等の工夫を行い、学習意欲への影響について検証を行った。

5. 対話に見られる日本語学習者のフィラー連続使用に注目して－

永井絢子（筑波大学）

本研究の目的は、日本語学習者のフィラーの使用状況を明らかにし、指導方法を検討することである。韓国人・中国人日本語学習者と日本語母語話者による対話をデータとし、日本語母語話者と比較しながら分析した。その結果、日本語学習者は、フィラーを不自然に連続使用する場合が多く見られた。その原因として、日本語学習者は、フィラーを連続使用する場合においてもフィラーの形式が限られていたことが挙げられる。指導の際に

は、フィラーを組み合わせて使用すること、派生的なフィラーを使用することにも注意する必要があると言えるであろう。

●ポスター発表（上記5件を含む28件）

6. 実践につながる「日本語文法論」の指導を目指して

斉藤紀子（横浜国立大学）

本研究は日本語教員養成過程における「日本語文法論」の活動の報告と振り返りである。授業では1)学習者主体で行うこと、2)知識の獲得で終わるのではなく、それを現場での実践につなげられることを目標とした。本発表ではその目標達成のために取り入れた活動を記述し、期末評価とアンケート結果からそれらがどのように受け止められたかを報告する。演習形式で行った授業について、学習者は担当箇所しか勉強しない、講師の説明が少ない等と感じながらも日本語文法への興味や関心は高まったことが観察され、現場の視点を取り入れた活動では誤用の訂正と二義文の解釈が有用であったことが示された。

7. スピーチ授業における「他者評価」ータスク「ベストスピーカー」の実践からー

斉木ゆかり（東海大学）

評価の教育として、最も好ましいスピーカーの理由を記述するというタスクを実施した。記述された評価理由を分析したところ、上級者は内容、中級者は内容と態度に注目し、初級者は具体的表現を使用しなかった。そこで、日本語レベルに合わせ、項目を絞って評価させる必要があることがわかった。例えば、中級者には評価項目を提示し、具体的評価表現の練習をさせる。初級者には言語的要素以外の外的評価に絞って評価させることで活動を容易に感じさせることで、学習者の主体的学びを促進させる可能性があることが示唆された。また、タスクはロールモデルの設定や自己との比較だけでなく、純粋にスピーチを楽しむ機会を提供できる可能性がある事も認められた。

8. ナ形容詞の適切な使用場面について考えるー初級・初中級で学ぶ表現を中心にー

加藤恵梨・藤田裕一郎（朝日大学）

留学生に「先生、午後ひまですか」「先生は真面目ですね」と言われることがある。そのような表現は非文とは言えないが、聞き手に違和感を抱かせることがある。本発表では、「ひまだ」「まじめだ」「親切だ」などの初級・初中級で学ぶナ形容詞を例として、その語自体はマイナスの意味をもっていないのにも関わらず、使用場面、文脈や対象者によって聞き手に違和感を抱かせる要因について分析する。また、分析結果をもとに、それぞれの語がどのような場面等で使うと適切であるか、適切でない場合はどのような表現に置き換えたら良いのかについて提示する。

9. 日本在住の日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーー中級後半の日本語学習者を中心にー

安芝恩（九州大学大学院生）

第二言語環境における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー（以下、CS）は、教室環境での学習経験の有無にかかわらず同じ様相を見せるのだろうか。「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」より日本語能力が中級後半レベルだと判断される日本語学習者4名の「対話」の発話データを抽出し、CS使用の違いの要因に教室環境での学習経験の有無がかかわるかを分析した。その結果、同じ第二言語環境であっても、教室環境の日本語学習者と自然環境の日本語学習者のCS使用において相違点が見られた。

10. 帰国した留学生の日本語学習動機ーブラジル人学生を事例としてー

井上正子（芝浦工業大学）・山方純子（神田外語大学大学院）

言語学習に対する意識は、時間の経過や他の要因との関連で変容する。特に、日本語が主専攻ではない学習者の場合、日本語との接触の減少など環境の変化が影響すると考えられる。そこで、留学を終えて帰国したブラジル人日本語学習者を対象に、学習への意識・意欲の変容を探るべく、インタビューを行った。その結果、彼らは、現在の学習環境や自分のスタイルに適した学習方法を確立し、各々が明確な目標を持って、現在も学習を継続していた。さらに、どのように学習意欲を保ち、意欲低下を克服したのか、などを明らかにすることで、教師ができる援助を検討する一助としたい。

11. 中国人ゼロ初級「生活者」のための地域日本語教育に関する研究

陳帥（九州大学大学院生）

近年、地域日本語教育において、場面シラバスで「生活のための日本語」を中心とする教育を行うべきであるという認識が示されたものの、地域日本教室の中で実際にそのとおりにやっているところがまだ少ない。とくに勉強時間があまりなく、媒介語が使えないゼロ初級の学習者にたいして、それぞれのニーズや状況が異なるため、各日本語教室で様々な指導を試してきたが、うまく進めないところもある。そこで、本研究は日本に生活している中国人ゼロ初級者に注目し、彼らが日本語学習するときに困っていること、それに対して支援者側の対応の仕方を明らかにしたうえで、ゼロ初級「生活者」のための地域日本語教育のあり方を探る。

12. 会話クラスにおけるスピーチ指導のアクション・リサーチー学習者間インターアクションが生まれるスピーチを目指してー

山田航司（樹人医護管理専科学校）・古田梨乃（開南大学）

筆者らは台湾の開南大学で会話クラスを担当している。本発表は、いかに学習者の発表を学習者間インターアクションにまで発展させるかという課題をアクション・リサーチの手法で検討するものである。対象は2年生とし、1年間で3期に区切って実施した。1期2期の発表では文法・語彙・発音などの問題が多く、学習者間インターアクションにまで発展しなかった。そこで3期では3つの対応を行った。①ピッチカーブ付きの台本と台本を読み上げた音声ファイルを送付。②PPTや実物など、視覚情報の併用。③発表の最後に質問を設ける。①～③を行なった結果、改善すべき点は残っているものの、学習者同士の会話に発展させることができた。

13. 中級から中上級への向上に必要な要素に関する一考察ーループリック評価表を用いてー

鄭在喜・藤田百子・三井一巳・吉田好美（早稲田大学）

本発表者の所属校では、中上級レベルでレポート活動を実施しているが、学生のレポートから多くの課題が見られる。本研究は学生と教員を対象に質問紙調査を行い、調査結果とループリック評価表から中上級への向上に必要な要素を探った。その結果、教員は文法の正確さや表現の適切さを重視している一方、学生はレポートの構成や自分の意見がはっきり書かれていることなど、内容を重視していることが分かった。なお、ループリック評価表からも同様の傾向が見られた。このことから、中級から中上級への向上に必要な要素をループリック評価表によって明示的に提示することが、学生のレベル向上に対する意識を高めるために効果的であることが窺えた。

14. 大学キャンパスにおける禁止表現の日中対照研究

王天昊（筑波大学大学院生）

より安全で安心な学習生活環境を確保するために、大学キャンパスにさまざまな禁止機能を表す標識や掲示物が立てられている。本発表は、日中両国のそれぞれの一つの総合大学（筑波大学と吉林大学）に着目し、キャンパスの中の禁止表現を対象にして、対照研究を行うものである。写真に撮った禁止表現を文字化して、両国の大学キャンパスにおける禁止表現の使用状態と差異を分析したうえで、差異の原因について言及する。その結論に基づき、現行の日本語の教科書における禁止表現の記述のための改善案を提示する。

15. 文法能力と聴解能力の関係性ー授受動詞と使役の依頼・許可表現に焦点をあててー

白鳥藍（日本女子大学大学院生）

文法能力と聴解能力の関係性を捉えるために、主語の省略と、授受動詞や使役の依頼・許可表現に焦点を絞って、学習者にとっては何が難しいのかを探っていく。初中級学習者10名と中上級学習者43名に『新・わくわく文法リスニング100』の該当の課をさせて、その誤答率と教科書での文型提出回数との比較を行った。同じ種類の学習項目であっても、授受動詞の依頼・許可表現の中で誤答率に差が見られ、学習者にとっては待遇性によって難易度が異なることがわかった。さらに、方向性のある動詞と使役が使われた場合の誤答率の高さが目立ったことで、中級においても文法項目にも重きを置いて聴解練習に取り組むことの重要性を指摘したい。

16. 学習者は発音テストのときに何を考えているのかー身体運動を用いた特殊拍の指導後のインタビューからー

中村則子（東京外国語大学）・木下直子（早稲田大学）・柳澤絵美（明治大学）

本研究の目的は、中級日本語学習者が発音テストの際に何を考えて発音しているのかを明らかにすることである。発音テストは、単語の読み上げ、文の読み上げ、絵の説明（以下 PS）という 3 つのテストで構成されており、身体運動を用いた発音指導を受けた後に学習者の到達度を測る目的で行われた。テスト終了後に、発音時に考えていたことについてインタビューを行った。その結果、単語・文の読み上げでは、発音指導の影響が見られたが、PS では発音より文法や内容に焦点が当てられ、発音指導の影響はほとんど見られないことがわかった。本研究の結果から、単語・文の読み上げと PS とのギャップをどのように埋めていくかという課題が明らかになった。

17. 書くことを楽しむ中級日本語作文教材開発

杉浦千里・木戸光子（筑波大学）

「幼稚な内容を書きたくない」「何をどうやって書いたらいいのかわからない」「考えるのが面倒だ」という中級学習者の声にどう応えるか。考えることを楽しみ、学習者同士で分かち合い更に深め、書きあげたものを互いに読み合って知識を広げ楽しむ作文教材開発を行った。特に留意したのは、知的な満足感を得られる「題」の設定、学習者同士が話し合いながら書きたい内容をまとめていく授業形態、レポート作成にも結び付く「型」（構成）への意識の 3 点である。翌年度は開発者以外の教師がこの教材を使用し授業を行ったことで、他の視点、主に表現形式と授業での提示のしかたについて改善することができた。

18. 日本語スピーチコンテストを通じた日本語学習支援体制構築の試み

菅陽子（東北大学）

本報告では、報告者の勤務する東北大学会計大学院国際会計政策コース(IGSAP)において、2017 年春学期に開催した第一回日本語スピーチコンテストの実例を紹介し、その準備・開催過程において学習者を取り巻く環境を日本語学習支援が行われやすい体制に整備していった試みを説明する。具体的には、第一に教員、事務職員、IGSAP 支援組織、学習者の日本語スピーチコンテストとの関わりに基づいた関係構築について、第二に日本語学習が考慮された校内の設備整備についてを紹介する。これらを踏まえて、日本語スピーチコンテストを実施することの新しい意義・効果等に関して提案する。

19. FileMaker を用いた数学専門用語教科書作成プロジェクト

青木由香利・北村よう（東海大学）

数学の専門用語の習得は留学生にとって不可欠であるが、内容理解を重視する数学の講義中に、専門用語までを丁寧に教えることは、時間的にも困難である。そこで本学では、数学担当教員と日本語担当教員で情報を共有し、わかりやすくかつ留学生が自主的に学習できるような専門用語の教科書の開発を進めている。その開発には FileMaker というソフトを利用し、本論文で示す、「漢字練習帳」「例題文集」「キーワードテスト」「教員のための漢字リスト」が作成された。その内容と、学生からの評価を本研究で示す。

20. 小説の理解を深める中級前半日本語の演習コースの試み

数野恵理・嶋原耕一（立教大学）

本発表では、中級前半の学習者が日本の小説について理解を深めることを目的とした、演習コースについて報告する。コースでは毎週、日本語学習者向けに書き直された文学作品のほか、書き直されていない短編小説を事前に全員が読んでくることを課した。授業内では精読をせずに、担当者があらすじを発表し、グループで印象に残ったシーンなどを話したり、解釈について話し合ったりした。また、学期の最後には多読をして好きな本を読み、ビブリオバトルをするという活動をした。本発表では、コース終了後のアンケート調査から学生の意識の変化を示し、今後の課題を考察する。

21. 日本語学習者が引用を論述に取り込む際の問題点—論旨展開と引用情報の質に注目して—

石井怜子（麗澤大学）・菅谷奈津恵（東北大学）

引用は、形式的な適切さと同時に、それを自身の文章にどう統合するかが重要な問題である。本研究は、留学生対象の読解授業の課題として作成した論説文の 2 名の作成事例を、引用を論旨展開においてどのように取り込んでいるかという視点で分析した。分析の結果、1 名は引用を自身の主張の裏付けとして取り込みながら論旨を

展開しようとしていたが、1 名は引用部分と自身の主張が統合されず、別個に論述していた。しかし、2 名とも、最終結論を支持する論拠となる引用は統合ができておらず、また内容の説明も不十分であり、引用元情報の内容理解の問題が示唆された。

22. 漢字力診断テストにおける新しいフィードバック画面の設計

加納千恵子（筑波大学）

筑波日本語テスト集（TTBJ=Tsukuba Test-Battery of Japanese）に格納されている漢字力診断テストでは、受験者が受けた 120 問からなるテスト問題の結果を 12 の評価項目ごとに横棒グラフで表示することにより、受験者に自分の得意な部分と不得意な部分について視覚的なフィードバックを与える画面が用意されている。さらに学習者の不得意な部分に関して、その後どのように漢字学習を進めればよいかというアドバイスを与えることを目指したフィードバック画面の改修を行った。本発表では、新しいフィードバック画面によって期待される効果および今後の課題について述べる。

23. 学習者はどのように引用のしかたを判断しているか

畠山理恵（立命館大学）

上級レベルの学習者のための授業・文章表現において、まとまった・ある程度学術的な文章が書けるようになることを目指して、各種の表現技法を導入・練習している。その一つが引用である。本稿で対象としたクラスで、試みに直接引用・間接引用のどちらを用いるか判断する練習を取り入れた。コース終盤に、指定した資料から引用して文章を完成する課題にあたらせ、後日文章完成に至る過程を口頭で説明してもらったところ、それぞれ何らかの基準をもとに引用のしかたを判断・決定していたことが明らかとなった。本稿では、その説明並びに完成後の文章を手がかりに指導内容を検証する。その上で、今後の指導に向けて得られた示唆を述べる。

24. 日本語学習者の「不満表明」における一考察－レベル別の学習者の比較から－

荒井未有（筑波大学）

本発表は「不満表明」の中でも状況改善が可能な場面に焦点を当て、エストニアの日本語学習者のレベル別の言語行動を日本語母語話者との比較から分析したものである。基本的に日本語のレベルが上がるにつれて、学習者は母語話者に近いストラテジー使用をする傾向がある。しかし、目上の相手に対しては、日本語レベルの低い学習者の方が母語話者とストラテジー使用が近く、現状をはっきりと述べているのに対し、日本語レベルが高い学習者では目上の相手の引き起こした好ましくない状況に言及しない傾向が見られた。この結果を踏まえ、日本語学習の中で「不満表明」についてのストラテジー、言語使用の獲得について日本語教科書から分析する。

25. ファン・ライティングとしてのインタビュー報告の執筆

俵山雄司（名古屋大学）

学術的な目的でもなく、生活に密着した実用的な目的でもない、学習者の交流促進を目的としたインタビュー報告を執筆する活動を行った。モデルとなるインタビュー記事の読解から始まり、テーマ選び、ペアでの相互インタビュー実施、原稿執筆、インタビュー相手による内容チェック、他の学習者からの読後コメントを経て、最終原稿を作成した。学習者からは、クラスメートについて深く知ることができた、好きなテーマを選べたので楽しくできたなどのコメントが得られた。また、学習者がモデル記事で使用されていた引用形式や叙述スタイルを積極的に取り入れて執筆する様子が観察された。

26. 日本語アクセントの習得における知覚と産出の関係に関する再検討－中国語母語話者を対象として－

王睿来（神戸大学大学院生）・磯村一弘（国際交流基金）

日本語アクセントの習得における知覚と産出の関係について、先行研究には両者の間に相関がないとするものが多い。本研究では、この知見を再検討するため、学習歴 6 か月程度の中国語を母語とする日本語学習者 52 名を対象に、知覚実験と産出実験を行なった。知覚実験では、1 拍～4 拍の無意味語音声（助詞「が」）を付けて聞かせ、該当箇所（助詞）にアクセント記号を記入させた。産出実験では、1 拍～4 拍の未知語（助詞「が」）付きでアクセント型とともに呈示し、読み上げさせた。その結果、知覚と産出の間に強い相関が認められた（ $r=.84$, $p<.001$ ）。本研究により、日本語アクセントの知覚と産出の間に相関がある可能性が示された。

27. モバイル端末のためのコロケーション検索サイト「かりん」の開発と試行

中溝朋子（山口大学）・坂井美恵子・金森由美（大分大学）

本サイトは、発表者らが「BCCWJ」（国研 2011）のデータを基に中上級日本語学習者を対象に開発した PC・タブレット用コロケーション検索サイト「かりん」のモバイル版である。スマホなどで使用可能で、名詞と共に起する動詞と修飾語が検索可能であり、ふりがな、および作例による例文・翻訳の付与、JLPT などの指標の提示、サブコーパス別相対頻度など学習者のための工夫が加えられている。発表ではサイトの紹介とともに、2017 年前期に発表者らの大学で実施した試行の結果についても報告する。試行では有用との回答が多かったが、検索可能な名詞・例文追加の必要性、機種による不具合や操作上の難しさなどの問題点が指摘された。

28. 日本語ボランティア活動が継続できるシニア社会人男性は、なぜ「一方的に話す」ことをやめられたのか

高橋志野（愛媛大学）

日本語教育の背景知識が全く無い、特にシニア社会人男性が日本語クラスのボランティアに参加する際、自分が一方的に話し学習者に話す余地を与えない等の問題が生じやすい。しかし、発表者の所属教育機関で、一定期間以上ボランティアが継続できているシニア男性は、傾聴力が高まる等参加態度に変容が起きている。本発表では、8 年以上ボランティア活動に参加しているシニア男性 2 名にインタビュー調査を行った。その結果、授業に参加する留学生と人間関係の構築が進むに従って、相手を知ろうとする気持ちが深まり、その結果、留学生との対話で生まれる間が怖くなくなってきたことが明らかとなった。

【午後の部】

●口頭発表（5 件）

29. 留学生に対する数学の学習支援—中東圏留学生に対する予備調査をもとに—

高岡邦行（日本工業大学）・田辺直行（東京日本語教育センター）

本研究の目的は、日本の大学進学を希望する中東圏からの留学生が数学学習の際に感じる困難点を明らかにすることである。そのために、筆者らは日本語教育機関に在籍する中東圏出身学生 9 名に対してアンケート調査と、それを元にしたインタビュー調査を行なった。本発表では、アンケート調査で「日本留学試験を難しい試験だと感じる」と答えた学生 7 名に対して行なったインタビュー調査の結果を、彼らが母国で受けた数学の教育内容に焦点を当てて、報告する。また、その 7 名の中に、電卓に関して母国で他の学生とは異なる教育を受けた学生がいたので、それについても報告する。

30. 学習成果につながる「話し合い」とは—タスク活動の実践を通して—

井手友里子（南山大学）・伊東克洋（東京外国語大学）・駒田朋子（南山大学）

日本語教育でも協働学習が普及し、その効果が多く報告されているが、グループによっては協働的にならず学習効果が得られない場合もある。本稿では、中上級日本語授業で行った話し合いを使用したタスク活動を観察し、協働学習における「よい話し合い」とは何か、について考察する。また、話し合いがその成果にもたらす影響も探る。タスクはある課題について学習者がグループ内で考えを整理・統合するもので、1) 個人思考、2) 個人思考のシェア、3) 話し合い、4) グループでの発表という手順で行われた。発話内容の検証の結果、ラポール構築行動が多く、十分な話し合いが行われたグループでは、タスク活動を通じて内容が改善されている例が見られた。

31. アクセント教育のための E ラーニング教材

河野俊之（横浜国立大学）

日本語学習者の発音の問題として最後まで残るのがアクセントである。アクセント教育の教材は、モデル音声を繰り返させたり、音声を聞かせ、そのアクセント型を答えさせたり、各語のアクセント型を暗記させたりするものであり、必ずしも十分な効果が上がっているとは言えない。そこで、本研究では、動詞と漢語名詞のアクセント教育のための E ラーニング教材を作成したので報告する。動詞については、0 型と-2 型しかないことを教え、音声を聞かせ、そのどちらであるかを答えさせる。さらに、文に含まれる動詞のアクセント型についても同様に答えさせる。これにより、教室外でも動詞のアクセントを学ぶことができる。漢語名詞についても同様に行う。

32. 視覚障がいを持つ日本語学習者の日本語学校での支援に関する実践報告

吉村敦美・水野雅方・近藤晶子・海老名貴子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

当センターでは、2016年4月から2017年3月まで、大学院進学を希望する視覚障がいを持つネパール人日本語学習者を受け入れ、留学生活支援、日本語指導、進学指導を行った。留学生活支援として、移動に関するオリエンテーション、本センター寮の設備整備、使用教材の点字化、音声化等を行った。晴眼学生と同じ教室で学べるように、授業では丁寧な状況説明、レアリアの多用などの工夫をし、テストは問題を若干変更して点字または音声で実施した。主に JLPT 対策として取り出し授業を行った結果、語彙、文法、聴解の伸びが見られた。教員のサポートの元進学準備を行い、大学院に合格、進学した。今後、実践報告が蓄積され、情報の共有体制が整うことを期待する。

33. 日本語のヴァリエーションから言語の多様性を学ぶ上級クラスの実践報告

小野正樹（筑波大学）

日本語上級レベル学習者を対象とした、日本語自体への興味・関心・理解と、運用力を深めることを目的とした授業の実践報告である。日本語学には、文法、語彙を中心とした豊富な知見があるが、日本語学習者には先端の日本語研究に触れるきっかけが少ないように思われる。『日本語学の教え方—教育の意義と実践—』福嶋健伸・小西いずみ（2016）では、教授内容を示しているが、本授業では日本語の知識を増やすだけでなく、1) 自身の母語理解を深めること、2) 多言語の理解を深めることも目標とし、文法、語彙、文字、方言についての日本語クラスでの実践を紹介する。

●ポスター発表（上記5件を含む28件）

34. トラブル事例を課題とした主体的学習—記述練習への発展—

中林律子・久野かおる・三宅祐司（東京福祉大学）

東京福祉大学は実社会で直面する多様な課題に適切に対応するための「思考力」「創造力」「問題発見・解決能力」の育成を目標とし、学生自身が積極的・能動的に学ぶことを教育理念としている。当別科では留学生が増加し、学生が事故や犯罪などトラブルに直面するケースが増えた。そこで、「なぜトラブルが起こるのか」「トラブルを防ぐためにどのような行動が必要か」グループワークなどを通して学生自身に主体的に考えさせる授業を行ってきた。さらに今年度より、日本留学試験の記述問題を視野に入れた練習を導入した。本発表では作成した記述問題を紹介し、この学習活動が学生の問題意識や記述能力を高めるためどのように効果的かを検討する。

35. 日本事情科目における「学習者の日々の疑問」を教材化した実践—Project Based Learning を手法として—

仁谷沙耶香（北陸大学）

国内の大学における、日本事情科目での実践を報告する。実施期間は2017年度春学期である。この授業では、数回に渡り、学習者の持つ日本に対する日々の疑問を授業で扱うトピックの中心に据えた。授業はPBLの手法を用い、①問いに対する仮説を立てる、②インターネットで調べ学習をし、③資料を持ち寄りピアで考察する、④発表と小レポート作成、という流れで進めた。このような流れを経て、小レポートにおいては、仮説設定時とは異なり、データに裏打ちされた新たな知見が述べられ、日本事情の理解がより進んでいた。また、授業アンケートを通じ、学習者は授業満足度が高く、授業形態を肯定的に捉えていることが明らかになった。

36. 日本語初級学習者におけるアニメを使用した文法導入の効果—アニメ『千と千尋の神隠し』を使用して—

神夏磯晴香・大久保亜紀・重信楓（神戸松蔭女子学院大学大学院生）

近年、日本語教育の現場において、アニメやマンガを使用した授業が増えている。しかし、その多くは中上級レベルを対象としており、初級レベルは、教科書を使って授業を展開する。このような、文法積み上げ式の授業が多く、生の日本語に触れる機会が少ない。また、臼井（2012）にて、聴解能力の限界により、アニメの活用は中級もしくは中上級以上に限定されていたと述べられている。今回、発表者は、アニメを使用した授業の可能性を模索するべく、特に初級レベルの学習者を対象とし、アニメ『千と千尋の神隠し』を基に教材を作成し、初級レベルで学ぶ語彙や文型を、映像とともに指導した。本発表では、授業実践とその結果、これからの課題について報告する。

37. 授業における語の接触方法および接触回数の増加が学習者に与える効果

相澤早帆（日本女子大学大学院生）

語彙の授業は、筆者の勤務する日本語学校では問題演習や小テスト等でなされることが多いが、学習意欲の低い学習者にとっては毎日繰り返さなければいけない点で負担が大きく、語彙の学習を諦めてしまう学生も少なくない。本研究では、①教師による説明、②語に繰り返し接触させる授業、また③短文作成の練習が、語の理解に影響を与えるかどうか、対象クラスを上・中・下位群に分け事前事後テストの変化を調査、分析した。結果として、どのレベルにも効果がみられたが、特に中位・下位群に有効であることがわかった。また、授業後アンケートから、学習者自身も①・②・③に対して有用性や必要性を感じたことが示された。

38. 日本語・日本事情遠隔教育拠点が提供する日本語学習者／教師サポートコンテンツ

伊藤秀明・関崎博紀・ヴァンバーレンルート・許明子・小野正樹・木戸光子・酒井たか子・加納千恵子（筑波大学）

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点（以下、拠点）では、日本語学習者／教師のサポートコンテンツとして、日本語学習サイト、WEB テスト、WEB コーパスや学習項目解析システムなど多数のサポートコンテンツを開発、公開している。本発表では、拠点で開発したサポートコンテンツをそれぞれ紹介するとともに、現在、開発を検討しているサポートコンテンツについても具体的なアイデア（教材開発、AI を利用した日本語教育）を示しながら報告する。また、その際に日本語教育の現場ではどのような利用の可能性が考えられるのか、日本語学習者／教師をよりサポートできる方法論についても議論を行う。

39. 大学の教養科目におけるレポート指導の効果ー引用の習得を中心にー

菅谷奈津恵（東北大学）

本研究では、大学の教養科目で実施されたレポート指導を通じて、参考文献の選択や引用表現の使用がどのように変化したかを検討した。調査対象者は、日本人学生1名と中国人留学生1名である。分析データは、学期中に提出された小レポートとアウトライン、最終レポートである。分析の結果、学期前半の小レポートに比べて最終レポートでは、より信頼性の高い参考文献が使用されており、引用表現も多様化したことが明らかになった。ただし、最終レポートには、引用と自分の言葉との区別が不明瞭な箇所や、引用が不要と思われる箇所での過剰引用も見られた。引用に関わる能力の習得には時間を要し、根気強い指導が必要であると思われる。

40. 相手の要求に応じられない場合の対応の仕方ーメール文における日本語母語話者と日本語学習者の違いー

金庭久美子（立教大学）・金蘭美（横浜国立大学）・橋本直幸（福岡女子大学）・川村よし子（東京国際大学）

本研究では、日本語母語話者30名と日本語学習者（韓国30名、中国30名、ドイツ30名）を対象に二つのメールタスク（タスクA：知り合いから頼まれた翻訳を断る、タスクB：大学の事務所に指定日に行けないことを知らせる）を与えた。その結果、日本語母語話者はタスクAでは相手に配慮して「できそうにない」等の婉曲的な表現を用いたが、日本語学習者は共通して直接的に「できない」ことを伝えていた。一方、タスクBでは日本語母語話者は感情に訴えることなく問い合わせていたが、日本語学習者は困難な状況をアピールし相手配慮に欠けていた。このことから、要求に対し応じられない場合、相手に配慮した対応の仕方を指導する必要がある。

41. 研究計画書の添削に於ける問題点と解決方法

山崎智子（オーエルジェイランゲージアカデミー）

本研究では、研究計画書の添削に於ける問題点を整理し、解決を模索する。日本の大学院に進学を希望する留学生には、当然のように高度な「日本語運用能力」（森山（2006））が要求されているが、研究計画書の作成能力について議論されることは多くなかった。しかし、日本語能力が高く専門知識を備えた学生であっても、研究計画書作成には大いに苦しむのが実状である。そこでは、学問に対する学生側の意識と方法論の指導が先ず問題視されるが、指導者側にも、個人差のある教師間でのチームティーチングに改善すべき点が多い。そうした協働体制でも、研究計画書の完成度を高める指導ができるよう、最低限留意すべき項目を挙げていく。

42. 複数教員によるルーブリック記述の検証と課題—全学を対象とした初年次レポート課題から—

藤浦五月・宇野聖子・小針奈津美・坂井菜緒・柴田幸子・服部真子・中川純子・長松谷有紀（武蔵野大学）

本発表は、初年次でのレポートの書き方指導において用いているルーブリックの記述を教員8名で検証した結果を報告するものである。本実践では、全学約2000名を対象に日本語教員がレポートの書き方指導を行った。同質の教育機会を保证するため教員が連携し、最終成果物として約2500字のレポートを各学生が執筆した。本発表では、全教員が評価時に共同で用いているルーブリックの記述の検証プロセスを開示し、どのような記述が検証すべき課題として挙げられたかを報告する。改善すべきポイントを整理することで、今後多様な実践場面における評価検討・改善に役立られると考えられる。

43. 日本語学習者はどのように他の学生の口頭発表を評価しているのか—コメントシートからわかること—

花城可武（山梨学院大学）

本発表は、日本語学習者が他の学生の口頭発表を聞いて、何を基準にして、どのような評価をしているのか、口頭発表のコメントシートを分析した結果を報告する。データとして、発表の中から上手にできたと思われるものを学生に選んでもらい、そのコメントにどのような特徴があるかを調べた。出現頻度の高い単語として、「思う」「発表」「いい」「やすい」「大きい」「すらすら」などがあり、それらを使ったコメントが多かったが、アクセントや文法に関するコメントは一つもなかった。この結果から、学生が高く評価する発表とは何か、またそのためにどのような項目を意識して準備すればよいかのチェック項目を検討したい。

44. 発表の文字化作業を通した振り返り活動の実践と報告

石橋美香・大河内瞳（立命館大学）

本稿では、初年次教育における日本語の授業で実施した振り返り活動と、活動に対する学習者へのアンケート調査の結果を報告する。口頭表現力の向上には、学習者自身の気づきが重要であると考え、授業で発表する際に録音し、学習者自身がそれを聞いて文字化するという活動を行った。学習者の中には、この活動を通して、自身の発話の癖に気づき、改善点を明確化できた者もいた。また、アンケート調査より、気づきが得られた、発音の修正点が意識できるようになった等、学習者の多くが肯定的に活動を捉えていることが分かった。一方、日本語能力が十分ではないため、録音を聞いても発話の癖に気づくことが困難である等、否定的な意見も挙げられた。

45. 週ごとの「活動記録シート」を用いた学習者の振り返りについての考察

西山友恵（東海大学）

文化の授業の一環で用いた「活動記録シート」の取り組みと学習者の振り返りの記述について考察した。記録の内容は、①日本語学習、②新しい経験、③日本の生活、④週ごとの質問である。学習者は授業外で記入し提出、教師は添削とコメントを書き返却した。学習者の記述は、授業の感想や週の振り返りだけでなく、ジャーナル活動（久津間他 2011）で得られたコミュニケーションツールとして役立ち、授業運営に活かすことができた。ジャーナルと同様に自由度を保ちながら、項目と分量を大まかに決め簡略化したことは、学習者の負担感を減らし無理なく継続できた一因だと考える。毎週の短い振り返りは、ジャーナルの利点を取り込むことができた。

46. 学習者は教師からどのように「証拠」を引き出すか—学習者から始められる談話に焦点を当てて—

加藤伸彦（立命館大学）

ある形式が正しいことを示す「肯定証拠 positive evidence」と正しくないことを示す「否定証拠 negative evidence」は、第二言語の習得には欠かせない。そのため、教室内において教師は様々な方法で学習者に肯定証拠や否定証拠を与えている。しかしながら、学習者から教師に対し肯定証拠や否定証拠を求める方法については研究が少ない。肯定証拠や否定証拠が学習者の言語習得を促すのであれば、学習者から肯定証拠や否定証拠を求める方法についても研究する必要があると考えられる。本発表はこのような問題意識のもと、学習者が教師に対し肯定証拠・否定証拠を求める方法を、初級レベルの正確さ重視の授業で実際に得られた教室談話の分析を通して提案する。

47. 日本人留学生との教室外接触を取り込んだ教室活動の工夫ー中国の大学日本語教育における実践からー
清水昭子（北京大学）

発表者が北京で教えている日本語科学生のはほとんどは、会話機会を増やすため、日本人留学生のランゲージパートナーを持っている。しかし、日常的なトピックに関する会話はこなせるが、2 年生後半に入っても社会的なトピックや長く対話を続けたり、上級の話題で話したりするのは難しい学生が多い。そこで、発表者は、日本人留学生への「30 分インタビューを行い、その内容についてのポスター発表をする」という授業課題を設定し授業活動を行った。これにより、上級会話へのきっかけを作ることができ、学生から「自信が深まった」との評価を得た。本発表では、一連の授業活動と学生の学習の広がりを紹介したい。

48. 日本語教育の地域化ー孤立環境におけるカザフスタン日本語教育の現状からの考察ー
ショリナ・ダリヤグル（筑波大学大学院生）

国際交流基金（2017）によると、世界各地域で活躍している日本語教師が 64,108 名であり、そのうち 70%以上が日本語を母語としない非母語話者教師である。グローバル化している世界の日本語教育が海外の教育現場を中心に行われており、各地域において学習動機や学習環境がますます多様化している。佐久間(2006)は、海外の日本語教育の特徴を①「中等教育段階以下の学習が多い」、②「実用に直結しない日本語教育が多い」、③「観光業に関係のある日本語教育が多い」と分類している。そこで本発表では、「実用に直結しない」という特性があるカザフスタン日本語教育において、現地の日本語教師のライフストーリーを考察し、地域化の重要性について言及する。

49. 機能語用例文データベース「はごろも」における文法項目の意味・前接形態・文法カテゴリー情報の記述と今後の課題

内丸裕佳子（岡山大学）・堀恵子（東洋大学）

機能語用例文データベース「はごろも」は、日本語教育で扱われる 1,848 の文法項目を web 上で検索できるツールである。公開中の情報に加え、現在、意味大分類、意味、前接形態、文法カテゴリー情報の記述について調査・研究を行っており、これらを今後書き足していく。本研究では次の 6 点、①現在公開している 620 の意味用法と新たに加える意味大分類との対応関係、②文法カテゴリー情報、③意味大分類と文法カテゴリーとの対応関係、④文法項目の意味記述、⑤前接形態の記述方法、⑥今後の改善点について述べる。

50. 年少者用 SPOT による小学生の日本語能力評価ーある公立小学校全学年 600 名に対する試行結果の検証ー
酒井たか子・小林典子（筑波大学）

客観的に短時間で日本語力が診断できる SPOT（Simple Performance-Oriented Test）を、年少者を対象とした版として開発し、公立小学校 1 年生から 6 年生約 600 名に実施した。SPOT は、問題形式は従来の大人対象の SPOT と同様で、自然な発話速度の読み上げ文を聞きながら平仮名 1 文字を空欄に書き取らせるものである。小学校の国語教科書および中学の国語教科書から選び出した文法項目を中心にそれぞれ 60 問で構成されている。学年別の傾向および得点の低い児童の要因について分析を行ったが、調査結果は多言語背景の子供の日本語力を推定する際の指標になることが期待される。

51. 大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査
近藤裕子（大正大学）・中村かおり（拓殖大学）・向井留実子（東京大学）

高校までの作文や大学入試の小論文などでは、主張の根拠として、個人的な経験を用いることが許容されている。一方で、大学に入ると、レポート・卒業論文作成を見据え、初年次段階から、いかに客観性を担保するかが重視される。高大の指導にはこのようなギャップが認められるが、この点について、特段の手当のないままアカデミック・ライティング指導が行なわれてきた。学生が習得したことのレディネスと、大学で求められるライティングスキルの差を明確にすることが必要であろう。本研究は、初年次の学生が入学時に作成した小論文を、大学で求められる客観性の担保という観点から分析し、彼らのレディネスにどのような不足があるのかを明らかにしようとするものである。

52. 日本語学校におけるビジネスコースデザインと教師に求められるスキルについての一考察ー『課題プロセスで学ぶビジネスコミュニケーション』を使ってー

林田なぎ（早稲田文化館）

日本語学校は日本語を母語としない学習者のための日本語教育機関であるが、大学、大学院、専門学校への進学予備教育機関としての役割のほか、就職を目指す、あるいはすでに就業している学習者のニーズに応えるべく、「ビジネス」に特化したコースやクラスも設置している。本稿では、日本語能力を証明できる資格取得者など、ある程度の日本語能力が備わった留学生を受け入れるビジネス系専門学校ではなく、日本語学校における「ビジネスコース」のモデルについて考察、1年間のコースデザインとカリキュラム、使用テキスト、授業の実践と今後の課題、課題解決に向けての一案を述べる。

53. 多言語背景の児童生徒を対象とした年少者用 SPOT の実施ーインターナショナルスクールにおける測定結果と分析ー

河野あかね（つくばインターナショナルスクール）

年少者日本語評価科研グループでは、多言語背景の児童生徒の日本語の学習言語能力を客観的かつ簡易に測定するための年少者用 SPOT として、学習者のレベルに応じた YA、YB、YC の3種類の版を開発した。これまで、インターナショナルスクールにおいて、用紙版の年少者用 SPOT による測定に継続的に取り組み、各版における学年毎の正答数、日本語授業理解度との比較、経時的な変化の分析などを行い、児童生徒の日本語能力を診断してきた。本発表では、2016 年度実施分の年少者用 SPOT の測定結果、および年少者用 SPOT の各版間の関連性や関係性について報告する。

54. 複言語使用者の言語学習ビリーフと日本語学習に関する一考察ー複言語を背景に持つ日本語学習者3名を事例としてー

良永朋実（九州大学大学院生）

日本語学習者の出身国や母語などの背景が多様化するとともに、複言語を背景に持つ日本語学習者も増加してきている。複言語を背景に持つ人々は、彼ら特有の言語学習ビリーフを持っており、それを日本語学習にも活かしているのではないかと考えられる。これまでのビリーフ研究は、国や地域ごとに行われる量的な研究が主であり、国や地域による特徴を考察したものが多い。そこで、本研究では、複言語を背景に持つ日本語学習者3名を対象とし、彼らの言語学習ビリーフと日本語学習についての質的研究を試みた。その結果、彼らには共通するビリーフが見られ、自身の言語学習経験を日本語学習にも利用していることがうかがえた。

55. 日本語教育における『学び合い』の実践

元田静（東海大学）

『学び合い』は、上越教育大学の西川純教授が開発した学習方法で、現在日本の学校教育や塾などで注目されている。『学び合い』とは、「一人も見捨てない」「全員が課題を達成する」という理念のもとに、授業中に学習者同士が自由な方法でわからないところを教え合い、課題を達成するという学習方法である。発表者は、この方法が日本語教育においても共同体感覚の育成や学習内容の理解に有効なのではないのではないかと考え、中級日本語クラスにおいて継続的に『学び合い』の活動を実践した。発表では、実践の中での学習者の様子、変化、および感想について報告し、その有効性と課題について検討する。

56. 映像付きコーパスによる日本語教育の試み

葛金龍（中国南京航空航天大学）

スティヴェン・デ・クラッシュェン（Stephen D. Krashen）のインプット仮説によると、第二言語能力の獲得は、主として学習によらず習得により実現されるものとされている。効率的な習得には、理解可能で面白くて関連性を持ち、文法的順序によらない十分なインプットが必要とされる。中国における外国語教育はいまだに文法や語彙や文型の「学習」を基本としており、真正性のある自然言語のインプットが足りないだけに、口語の能力が弱く、言語運用の能力に欠けるのが一般的である。以上の理論や実際の問題に基づき、本研究は映像付きコーパスを構築し、映像資料を教材とし、それに注釈ファイルを付けて、映像付きコーパスに基づく日本語補助的教育システムの構築を試みようとしている。

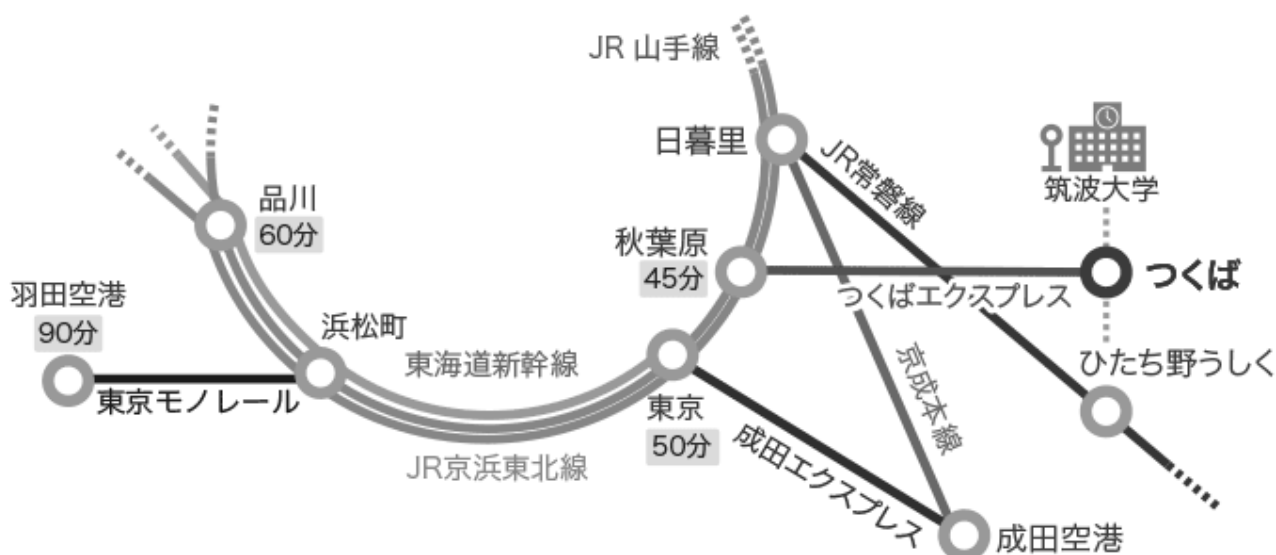
【会場案内】

筑波大学

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

http://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba_access.html

つくばエクスプレス秋葉原駅から快速 45 分、「つくば駅」下車＋バス



【つくばセンターから筑波大学まで】

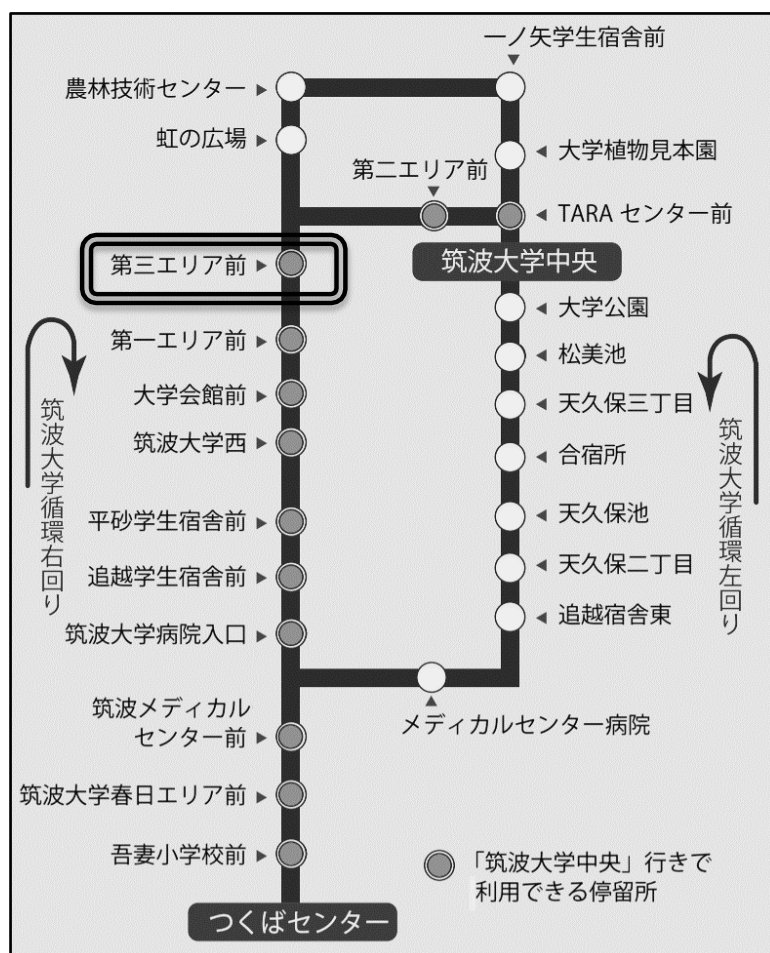
6 番乗り場でバスに乗り、15 分ほどで着きます。「第三エリア前」下車徒歩2-3分。

発表者（9:15までに到着）なら、8:42、8:47、8:55の「筑波大学中央行」か、8:40の「筑波大学循環右回り」。

参加者（10:00までに到着）なら、9:07、9:09、9:10、9:25、9:37、9:45の

「筑波大学中央行」か、9:20の「筑波大学循環右回り」。

（9:00や9:40の「左回り」でも、遠回りになりますが20分ほどで行けます）。



【学内の会場位置】



【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2017 年度会費（3,000 円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がありましたら、jlem-ml#jlem-sg.org（#は@です）まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】 （1）郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

（2）銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通（または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会